

一八六六年恐慌 (一)

三 宅 義 夫

四 (承 前)

既掲のようにマルクスは『資本論』第一巻のなかで、「一八六〇年にはイギリス木綿工業の絶頂」とするとともに、そこで「インド、オーストラリアならびに、他の諸市場ははなはだしく充溢して、一八六三年になつてもまだ全ストックが吸収されなかつたほどであつた。……一八六一年には昂揚がしばらくつづいたが、反動来、アメリカの南北戦争、綿花飢饉。一八六二年から六三年までは完全な崩壊」とし、そしてつぎのように述べている。「一八六〇年から一八六一年までの世界市場の状態から察せられることだが、綿花飢饉は工場主たちにとつては具合のよい時機にやつてきたのであり、(gelegen kann) ある程度有利だつたのであつて、(zumn Teil vorteilhaft) この事實は、マンチエスター商業会議所の報告中で承認され、議会でバーマストンやダービーによつて公言されたところであり、また諸々の出来事によつて確認されることである。もちろん、一八六一年には連合王国の木綿工場二八八七のうちには多数の小工場があつた。……小工場の多くは織物工場であつて、それらは一八五八年以来の繁栄期中に設立されたものであつた。……これらの小工場はたいして破滅した。彼らは、綿花飢饉のために妨げられた商業恐慌に

よつても同じ運命に見舞われたであらう。」と(Bd. I, S. 479—80, 長谷部訳、青木版七三一—二ページ、傍点—三宅)。

この「マンチエスター商業会議所の報告中で承認され」といっているのは、おそらく右に見た『ブレッセ』一八六二年二月八日号所載の論説「綿花恐慌について」において取り上げている一八六二年初頭の同会議所年次会議での報告を指しているであろう。前掲のようにそこでマルクスは「すべての演説者たちは、……大規模な過剰生産の結果、アメリカの内戦やモリル関税や封鎖がなくても、現在の不景気はいやおうなしにおこらざるをえなかったことを、告白している」とし、「この問題の権威たるマンチエスター商業会議所の言によれば、イギリス紡績業の恐慌は、これまでのところ、アメリカの封鎖の結果ではなくて、イギリスの過剰生産の結果なのである」と述べていた。

また「議会でパーマストンやダービーによって公言され」といっているが、⁽¹⁾マルクスは『ブレッセ』一八六二年二月十二日号所載の論説「議会における答辞討論(Die Adressdebatte im Parlament)」(執筆日付二月七日。大月選集訳、補巻1、一八七—九二ページ)のなかでこのときのダービーの発言についてつぎのように記している。「——「彼(ダービー)はいった、工場労働者たちの克己的で威厳のある態度に自分は『感嘆する』と。しかしながら工場主たちにかんするかぎり、彼らをその賞讃から除外しなければならぬ。工場主たちにとっては、アメリカの動乱は非常に具合のよいときおこった。というのは、あらゆる市場での過剰生産と滞貨のために彼らはいずれにせよ商売の制限を蒙っていたからである」と。この「工場主たち」云々というのはダービー自身がこういつていたのではなかつたであろうが——。なおダービーがアメリカの内戦にたいする労働者たちの態度に「感嘆」の意を表したことは、この論説のあととところでマルクスはすかさずつぎのような皮肉を述べている、「ダービーは……選挙法改正のような『不穏な』論争的問題をとり上げないように、と議員たちに警告した。彼は、イギリスの労働者階級が普通選挙制か

ら除外されていることをアメリカ封鎖にたいすると同様の克己堅忍の精神でがまんするということを条件として、例によって彼らに喜んで賞讃の言葉を捧げようというのだ」と。

(1) ダービーは一八四四年以来トーリーの党首として、ホイッグ系のパーマストンとも一八五〇年代、六〇年代にほぼあい交代しつづ首相の地位に就いていた。当時一八五九年から一八六五年まではパーマストン内閣であり(パーマストンは一八六五年に死去した)、その前一八五八―五九年はダービー内閣、またこのあと一八六五―六六年のホイッグのラッセル内閣が選挙法改正に失敗して辞職したのち、一八六六―六八年はダービー内閣であった(ダービーは一八六九に死去した)。

マルクスはまた、右の「この事實は、マンチエスター商業会議所の報告中で承認され、議会ではパーマストンやダービーによって公言されたところであり、また諸々の出来事によって確証される場所である」という箇所に、「一八六二年十月三十一日の工場検査官報告書」、三〇ページ参照」という註を入れ、そしてここでは『報告書』のページを挙示するにとどめているが、『資本論』第三巻の方ではこの『報告書』の当該箇所からのつぎのような引用を掲げている(インスティトゥート版第三巻では『報告書』のページは、S. 28, 29 (30) “と” というように S. 30 が編集者によって補足されている)。

すなわちマルクスは——といっても、もちろん編集者エンゲルスの手が入っているわけであるが——第三巻第六章「価格変動の影響」の第三節を「一般的例証、一八六一―六五年の綿花恐慌」と題して『工場検査官報告書』からの引用を掲げているが、その最初の小見出し「前史、一八四五―六〇年」につぐ小見出し「一八六一―六四年。アメリカの南北戦争。綿花飢饉(Cotton Famine)。原料の欠乏と騰貴による生産過程中断の最大事例」の(Ed. III, S. 171-2, 長谷部訳、青木版二〇三―四ページ)、まず「一八六〇年。四月」として一八六〇年四月の『工場検査官報告書』が木綿工業の大繁栄を報じていることを掲げ——この『報告書』についてはマルクスが『トリビュン』一八

六〇年八月七日号、二十四日号所載の論說で取扱っていることをさきに見た——、ついで「一八六〇年。十月」として一八六〇年十月の『報告書』が「綿業、羊毛業、および亜麻業地方における事業状態は良好であった」云々と報じていることを掲げ、ついで「一八六一年。四月」として一八六一年四月の『報告書』が「事業状態は目下のところ不振である、……少数の木綿工場はショート・タイムで作業しており、多くの絹工業は部分的にしか操業していない〔絹のこの不振は、一八六〇年四月の『報告書』からの右の引用のなかで「絹をのぞくすべての繊維工業はこの半年の間はなほ好況であった」としており、また右の『トリビュン』論說の方でも英仏通商条約の結果「最近六カ月間にその状態がひどく悪化した唯一の工業部門は、絹織物業である」(大月選集訳、第九卷、二二〇ページ)と記していたところから見て、木綿工業のばあいとちがい繁栄のあとを受けた不振ではなかった)。原料は高い。ほとんどの繊維部門でも、原料は、消費者大衆のために加工されうべき価格をこえている」と報じていることを掲げ、そこでついでつぎのように記している。——「一八六〇年に木綿工業で過剰生産が行われたことが、いまにしてわかった(Es zeigte sich jetzt)。その影響は、そのごくいく年間も感じられた。『一八六〇年の過剰生産が世界市場に吸収されるまでには、二年から三年かかった』(『工場検査官報告書、一八六三年十月』、一二七ページ)。『一八六〇年初頭における東アジアの綿製品市場の不振状態は、ブラックバイン——ここでは平均して三万台の機械織機がほとんどもっぱら東アジア市場向けの織物の生産に携わっている——の事業に反作用を及ぼした。その結果として、労働需要がここでは、綿花封鎖の影響が感じられるより何カ月も前に、すでに制限されていた。……これによつて、幸いにも、多くの工場主は破滅を免かれた。在庫品の価値が——倉庫に在庫品を持っていたかぎりでは——高まり、かくして、さまなければかかる恐慌のさいには不可避である、恐るべき減価を免かれた』(『工場検査官報告書、一八六二年十月』、二八、二九〔三〇〕ページ)と(傍点—三宅)。

なお、マルクスはついで「一八六一年。十月」として、一八六一年十月の『報告書』からのつぎのような引用を掲げている、「事業はしばらく前から (seit einigen Zeit) きわめて不振であった。……冬の月の間多くの工場が労働時間をはなはだしく短縮するであろうことは、ありそうでないことではけっしてない。それどころか、……アメリカからの平素の綿花供給とわが国の輸出とを中断した諸原因をまったく度外視しても、最近三年間の生産のはなはだしい増加とインドおよび中国市場の混乱との結果として、来るべき冬の労働時間の短縮が必然となるであろう、ということが予想された」(工場検査官報告書、一八六一年十月、『一九ページ』)。この一八六一年十月というのは、さきに見たマルクスの『トリビュン』および『ブレッセ』に寄せた論説が書かれたところであり、マルクスもまたシヨート・タイムが一般的となるであろうこと、アジア市場で供給過剰が生じていることを告げていたことはすでに見たごとくである。だがさきに見たようにマルクスの論説では——なお「十月」の『報告書』が発表されるのは翌年春になってからである——、一方で供給過剰が生じつつあることを指摘してはいるが、シヨート・タイムはアメリカからの綿花供給杜絶の不安が高まり、綿花が暴騰してきたということから説明されていた。事実シヨート・タイムは供給過剰がわかってきたのに加えて、綿花の暴騰——「破滅的不均衡」——によって促進されたのであるが、マルクスが前面に立てて説いたのはアメリカからの綿花供給杜絶の問題であり、シヨート・タイムをしても手持ち原料は長くもたない、「もしアメリカの封鎖が一月(一八六二年一月)以後もつづいたならば! そのときはいっただいどうなるだろうか?」ということであった。だが日が経つにつれて——一八六二年春ごろには——過剰生産、過剰供給の規模がいちじるしく大きいことが明らかとなってきたのである。そしてそれとともにまた日が経つにつれて——一八六二年秋ごろには——、在庫品を持っているところでは綿花飢饉によって「増価 (Wertsteigerung)」(『資本論』 Bd. III, S. 132, 長谷

部訳、青木版一八〇ページ)の利益を享受しうることとなった。「これによって幸いにも多くの工場主は破滅を免かれた。……さもなければかかる恐慌のさいには不可避である恐るべき減価を免かれた」のであったが、しかしとともに他方、この綿花飢饉によって多数の小工場が「たいてい破滅した。彼らは、綿花飢饉のために妨げられた商業恐慌によっても同じ運命に見舞われたであろう」ということになったわけである。^(p.10)

綿花飢饉の資本家にたいする、また労働者にたいする影響はまた見るごととし、つぎにしばらくマルクス、エンゲルスの間で交わされた手紙を見てゆくこととしよう。

(2) 上掲の『資本論』第一巻 \$479-80 からのところで一八六一年における連合王国の木綿工場数二八八七のうちには多数の小工場があった云々というところに、マルクスは一八六二年十月の『工場検査官報告書』のページを註記しているが、当該『報告書』のこの箇所の引用もまた第三巻の前掲の節下に掲げられている、——*Bd. III, S. 154*、長谷部訳、青木版二〇六ページ。

(3) 上記のように第三巻第六章第三節「一般的例証、一八六一―六五年の綿花恐慌」は節全体が『工場検査官報告書』の引用から編成されており、そして最初の小見出しの「前史、一八四五―六〇年」について「一八六一―六四年。アメリカの南北戦争。綿花飢饉。原料の欠乏と騰貴による生産過程中断の最大事例」という小見出しを設けているのであるが、この小見出しの項は「一八六〇年。四月」から同十月、一八六一年四月と年月を追って『工場検査官報告書』からの引用を掲げ、そして「一八六一年。十月」として上掲の一八六一年十月の『報告書』を引用して終っており、そのあとは第三の小見出し「綿屑。東インド綿花(ストラート)。労働者の賃銀にたいする影響。機械の改良。澱粉および鋳物による綿花の代用。この澱粉整系が労働者に及ぼす影響。細番手糸の紡績業者。工場主の欺瞞」の項になっている。だが他方においてこの第三の項のはじめのページをすぎるとふたび「一八六二年。四月」、「一八六二年。十月」、「一八六三年。四月」としてそれぞれそのときの『報告書』からの引用を掲げ、ついで一八六三年十月の『報告書』からの引用を掲げられている。なお、ついで第四の小見出し「無価値体での実験」となり、そこでは一八六三年十月の『報告書』からのいくつつかの引用が掲げられている。

そしてこれらを通して見ると、第三の小見出し、第四の小見出しはかならずしもその項下に掲げられている『報告書』からの

引用文内容のすべてを蔽っているものではない。第三巻を編集したエンゲルスは「第五章以下では、主要原稿が、本篇〔第一篇〕、残部のための唯一の源泉である、——といつても、ここでもきわめて多くの置換えや補足が必要となつたのではあるが」と記しているが（第三巻「序言」、S. 9、長谷部訳、青木版一九ページ）、おそらく原稿では『工場検査官報告書』からの一連の引用がしるされているにとどまり、これにエンゲルスがすこしでも読みやすいようにと小見出しをつけたりしたものなのである（『資本論』初版の校正刷を読んでいたさいエンゲルスがたびたびもつと小区分（Unterteilung）をつけないと読者にとつて読みにくいと注意していたことが——一八六七年六月十六日付、また八月二十三日付エンゲルスからマルクスへの手紙——想起されよう）。なお第三巻のここで引用されている『報告書』の箇所は、上に記しておいた箇所ばかりでなくそのほかにもいくつかが第一巻の上記の綿花恐慌を扱っているところで引用されたり、ページだけを挙示したりされているが——そして第一巻のそこで見ている『報告書』の記述はほぼすべて第三巻のここで引用の形で掲げられている——、それらについてはのちにまた見ることにする。

五

一八六二年二月二十八日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「僕は今年は収入以上の支出になる。恐慌はひどくわれわれに影響を及ぼしており、すこしも注文がなく、(wir haben gar keine Aufträge) 来週からはただ半日だけの操業になるだろう」(傍点—三宅)。

一八六二年三月三日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「僕が最初から中国にたいする貿易の期待はゼロだといつていたことを君は憶えているだろう」⁽⁴⁾。最近の商務省報告書はこのことを確証している。

一八六〇年

一八六一年

中国

二八七二〇四五

三一一四 一五四

ホンコン

二四四五 九九一

一七三三 九六七

一八六六年恐慌(二)

一一一

計 五三一八〇三六 四八四八一二一

かくして輸出総額は減少した。直接のはふえているが、ホンコン経由のはへっている。一方、ロシアはまたも朝鮮に相對しているすこぶるいい島を占領した。これにジャバにおけるこの国の新「占領」を加えると、北太平洋の支配は彼らにとって確立された。⁽⁵⁾イギリスの全新聞がパム(「パーマストン」)の勢力によっていかにひどくロシア化されているかは、ロシアのこの方面への進出についてまったく沈黙していることで証明される」。

一八六二年三月五日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「もしアメリカで講和なしその他の結着がつけば「つかなければ、であろう」、一八六一年七月一日から一八六二年のそれまでの僕の全収入は一〇〇ポンドにへるようになるかもしれない「七月一日から翌六月末までが營業年度であった」。とすると僕は借越しになる (*ich also in Schulden gerate*)。われわれは山ほどの商品を抱えていて、さっぱり売ることができない。そしてアメリカの事態に秩序がつくまでこのまま動きがとれないでいたら、おそらく、われわれは十二月末までに儲けたすべての利益をなくしてしまおう。しかしながらなぐり合いはまだつづく⁽⁶⁾と僕は思う。連中に講和ができるなんていうことは理解できない。／＼朝鮮のそばのロシアの島とはなんだろうか？ またジャバ (*Java*) における占領とはなんだろうか？ (おそらくジャパン (*Japan*) ?) 僕はそれはすこしも知らない。／＼なお君の数字によると中国への輸出はそれでもいぢじるしく増加しているではないか。十年前には——僕の記憶しているかぎり——それは百万から三百万のところを上下していた」。

一八六二年三月六日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「君への手紙のなかでジアバといったのはジャパンのことだ。事実そのものはロシアの公報とアメリカ領事の報告とをのせたトリビュンの番号から知ったものだ、——イギ

リスの新聞ではいっさいさしとめられている。このトリビュンはアーカートに送ってまだ戻ってきていない。僕らはこれをまえにアジアにおけるロシアの進出についてのプレッセの一論説に利用した。しかし馬鹿どもはそれをのせなかつた。ご承知のとおり僕は名前の記憶が悪い。それでいま名前をいえないが、第一の島はジャパンの西南端と朝鮮本土とのちょうど中間にある。それは大きな、アメリカの報告によれば第二のセバスポールになりうる港をもっている。もう一つの直接ジャパンに属している島にかんしては、僕にして誤りなければそのなかにエゾがある。ともかく書類「トリビュン」を戻すようにしよう。／中国貿易は一八五二年までの状態とくらべればもちろん増加している。だがカリフォルニアやオーストラリアの発見以来のすべての市場のような割合ではまっただくなかつた。そのうえ、以前の報告でもホンコンはイギリス領として中国から切り離されていたので、『中国』という項下の輸出はいつも（四〇年代このかた）輸出総額「中国への事実上の」よりもすくなかつた。最後に、一八五九年以来の増加は一八六一年にはもとの大きさに戻ってしまった。／一八六一年の商務省報告書はすでにアメリカの危機（Krise）の結果として、種々の市場がイギリスの輸出にたいして占める順位に大きな変化が生じたことを示している。インドが一七九二—七六七ポンドで首位を占めている（セイロンおよびシンガポールを含む。インドだけでは一六四二—二〇二〇）。／第二の市場はドイツ、かつては第四位だつた。一八六〇年—一三、四九一—五二三ポンド、一八六二年—二一九三—七〇七三ポンド（オランダ経由のもの、およびよりすくないがベルギー経由のものを含まず）。……／フランスは今年第五位の市場だつた。一八六〇年—五二四九—九八〇ポンド、一八六一年—八八九六—二八二ポンド。しかしこのなかにはスイスが入っている。これにたいしてイギリスは現在フランスにとつての第一の市場だ。／輸出総額一二五—一一五—一三二ポンド（一八六一年）のうち四二—二六〇—九七〇ポンドがイギリスの『所領』および『植民地』向

けである。これにイギリスがこのほかのアジア、アフリカ、およびアメリカに輸出するものを加えると、ヨーロッパ諸国への輸出はせいぜい二三ないし二四パーセントにすぎない。もしロシアが最近十年間の巨歩をもってアジアに進出し、その末、その全努力をインドに集中するようにならば、ジョン・ブルの世界市場は終りとなる。しかもその終焉は、合衆国の保護関税政策によって——同国はジョンにたいする報復からも今日それをそう早く放棄することはまずないだろう——促進されることになる。そのうえジョン・ブルが発見して驚愕していることは、北アメリカおよびオーストラリアにおける彼の主要植民地が、ジョン・ブルが自由貿易論者になってゆくのにちょうど比例して保護主義者になってゆくことだ。パム(「パーマストン」)のアジアおよびアメリカにおける『活潑な政策』を賞讃しているジョンのうぬぼれた猥的な愚鈍性は、ジョンにとっておそろしく高くつくことになるだろう」。

(4) 以前、一八五八年十月七日付マルクスへの手紙のなかでエンゲルスがマンチェスターで急速に景気がよくなってきていることを告げ、「僕には、インドと中国とは当地の俗物どもの話し振りや市場の状況から推して、過剰生産のための最寄りの口実を与えるべきもののように思われる」云々と書いてきたのにたいする返事の十月八日付の手紙のなかで、マルクスはエンゲルスにつきのように書き送っていた。「とくに中国についていうと、一八三六年以来の貿易の動きをくわしく分析した結果、僕はつぎのことを確信した。第一に、一八四四—一八四六年の英米の輸出の昂揚は一八四七年にいたってまったくの思惑(Schwindel)であったことが証明されたこと、またそれにつづく十年間においても、中国からの英米の輸入はきわめて増大したのに、輸出は平均してほとんど停滞していたこと、第二に、五つの港の開港とホンコンの占領とは、貿易をカントンからシャンハイに移す結果しかもたらさなかつたこと、である(一八三九—四二年の阿片戦争の結果、南京条約によってイギリスは広東、廈門、福州、寧波、上海の五港の開港と香港の割譲とをえた)。そのほかの『商業地』は問題にならない。この市場不振の主な原因は阿片貿易であるように思われる。事実中国への輸出貿易の増加はいつもこの阿片貿易だけにかぎられている。だがこれに加えて、この国の内部的経済組織、すなわちその零細農業等々があり、これを粉砕するにはばく大な時日を要するだろう」と。上で「君は憶えているだろう」とマルクスがいつているのは、この手紙あたりを指していたのであろう。

なおマルクスは『トリビュン』一八五八年九月二十日号所載の論説「阿片貿易」(大月選集訳、第八卷、六八―七二ページ)において既掲のように、「連合国の全権代表が中国から奪い取ったあたらしい条約(天津条約のこと)についての知らせは、一八四二年第一次中国戦争が終ったときに商人たちの空想に浮んだのと同じような大々的な貿易拡張の予想を生み出したように見える。……貿易場の数が増加すれば、それにつづいてかならず对中国貿易が増大すると確信することができるだろうか? 一八五七―五八年の戦争が一八四一―四二年の戦争よりもっとすばらしい結果をもたらすという確実性があるだろうか?……中国人は商品と毒薬の両者を同時に買うことはできない」云々と述べていたが、また同じく『トリビュン』同年十月五日号所載の論説「英華条約」(大月選集訳、第八卷、八五―九二ページ)では、「一八四二年八月二十九日に……締結された中国との条約は、あたらしい对中国条約と同様に大砲の砲口のものでつくり上げられたものであったが、その条約の結果が商業的見地から見ると不首尾であったことは、いまでは……『ロンドン・エコノミスト』でさえも認めている事実である」とし、しかし同誌が「西洋の商品のために中国市場を暴力的に拡張しようとする最初の試みが失敗した理由」として挙げておられるところの、イギリスの輸出業者の思惑が大きすぎたこと、中国人の需要の性質に注意を払わなかったこと、アメリカやドイツ、ロシアなどの外国の競争によって損われたこと、太平天国の動乱があったことは、商品の選択の点は別として、理由として人を納得させるものではないとして統計をもってこれに批判を加え、とともにこれも既掲のようにつぎのような指摘をしていた、「对中国貿易史を注意深く検討すれば、天上帝国臣民の消費能力と支払能力が概していちじるしく過大に評価されていたと思われる。零細農業と家内工業とをその基本的核心とする中国社会の現在の経済構成の枠内で、外国生産物の輸入が多少とも注目すべき量に達するということは、とうてい問題になりえない」と。また『トリビュン』同年十月十五日号所載の論説「英華条約」(大月選集訳、第八卷、九二―九六ページ)においては、「一八五六―五七年度の各地貿易にかんする議会のブルー・ブックから抜萃した数字」をもって、「五つの新港の開放は五つのあたらしい貿易中心地をつくるかわりに、貿易をしだいにカントンからシャンハイに移した」ことを指摘し、「貿易の伸長が開港場の数に比例するという欺瞞的な思想は、文書庫のなかにしまいこまなければならない」と述べている。この「英華条約」についての二つの論説の執筆日付はそれぞれ一八五八年九月二十日、九月二十八日とされており(大月選集「著作年表」、一一八―二〇二頁)、エンゲルス宛の右の一八五八年十月八日付の手紙で「一八三六年以来の貿易の動きをくわしく分析した結果」といっているのはこれらの論説を書いたときのことであったのであろう。

このようにマルクスは当時、武力をもって中国を開港させることはイギリス商品にたいする大きな販路をつくり出すことにな

るといふ期待がイギリスにおいて一般的であったのにたいして、中国の経済構成が変化しなかり対中国貿易の伸長に大きな期待はかけられないといふ判断を強く持っていたのであるが、なおつけ加えておくと、翌一八五九年九月白河での英艦砲撃により「あらたな対中国戦争」が起りそうになつたが、マルクスは『トリビュン』一八五九年十二月三日号の論説「中国との貿易(Trade with China)」(大月選集訳、第八卷、一六二—一六三ページ)においてふたたびこの点をとり上げてつぎのように述べている。「以前そのころの呼び名でいわゆる天上帝国の門戸解放にともない「全人類のほとんど三分の一を含み、一般的動向にさからつて成長し、世界的につながつた組織から強制的に遮断されたため沈滞し、それゆゑ自国が「天国のように完成されている」といふ幻想で自己欺瞞することを楽しんだ巨大な帝国」——前掲『トリビュン』一八五八年九月二十日号論説)、アメリカとイギリスの通商の發達に与えるにちがいない刺戟について、きわめて不合理な觀念が流布されていたが、その当時われわれは、そういう誇張した期待がたしかな根拠を欠いていることを、今世紀の初頭以来の中国貿易の綿密な觀察によつて論証しようとした。当時われわれが立証したように、西欧の工場商品の売れ行きに反比例して増大する阿片の取引を別にしては、小農業と家内工業の結合である中国社会の経済構造のなかにこそ、中国への輸入貿易の急速な拡大を妨げる主要な障害が存在することを、われわれは見出した。こんにちわれわれは、当時の確言をさらに裏づけるものとして、『中国および日本にたいするエーデルン卿の特別の使命にかんする往復文書』の標題をもつブルー・ブックを引用することができる」とし、「アジア諸國の輸入商品にたいするじつさいの需要が、予想需要見込量、すなわち大部分は、新市場國の地理的広さや、その人口数や、いくつかの第一級海港において認められる外国商品の通常の売れ行きや、そうしたまったく皮相な数字にもとづいて立てられた見込みと喰いちがうたびごとに、貿易業者たちは、交易の範囲を拡げることがを熱望するあまり、えてして自分たちの幻滅の理由を、野蠻國の諸政府によつて設けられた人為的な通商条件が彼らの行く手を阻んでいるということに求めがちであり、したがつてそれらの条件は暴力によつてとり除かれうると考えがちである」が、このブルー・ブックでは、一八四二年の條約にかかわらずイギリス商品の中国への輸出はほとんど増加してないことが示されており、またそこでは、一八四四年にカントン駐在のイギリスの通商代表が本国に土着民の衣服の各種の見本に価格をつけて送つたがイギリスの諸商館はこの価格ではマンチェスターでは作ることができず、まして中国へ送荷することはできないといつた、と記している。かくしてマルクスはいふ、「世界でもっとも進歩的な工場組織がその製品を、もっとも原始的な機械織台で手労働によつて織つた織布よりも安く売ることができない」といふことは、どういふ理由によるのであろうか? すでにわれわれの指摘した小農業と家内工業との結合といふことがこの謎を解決す

る」と。そしてブルー・ブックが中国農民が農閑期を利用して自家労働で糸を紡ぎ、これを織っていると報じていることを紹介し、そしてインドをこれと対比してマルクスはつぎのような指摘をしている。「これとまったく同じような農業と家内工業の結合が、イギリス商品の東インド向け輸出にたいし長い間障害となり、現在なおこれを妨げているのである。しかしながら東インドでは、この結合は特殊な土地所有の状態にもとづいているのであって、この国の最高の土地所有者としてのイギリス人は、この土地所有をその根底から破壊し、こうして強制的にインドの自給自足的共同体の一部を、イギリス商品と交換に阿片、綿花、印度藍、大麻その他の原料を生産する普通の農場に変えてしまふことができたのだ」と。

(5) この「朝鮮と相対している島」というのは対馬のこと。対馬は当時、日本方面に手を伸びてきていたイギリス、フランス、ロシアが海軍基地として狙っていた港であったが、一八六一年(文久元年)三月ロシア軍艦ボサドニック号が対馬の芋崎浦に入り、水兵を上陸させ、くり返し対馬藩および幕府にたいしてこの港の永代借地を申入れた。これはけっきょくイギリス公使オーロコックが間に入り、ロシア軍艦は同年八月退去することとなった。いわゆる対馬事件であるが、マルクスがエンゲルスにこの手紙を書いているのは一八六二年であるから、このときはすでに退去したあとだったことになる。

また「ジャパンにおける占領」というのは、一八五三年(嘉永六年)七月にロシア極東艦隊司令長官プチャーチンが軍艦四隻を率いて長崎にやってき、そして翌一八五四年(安政元年)に——同年三月のアメリカとの日米和親条約(神奈川条約)、同年八月のイギリスとの日英約定につづいて——十二月にプチャーチンとの間で下田で日露和親条約が結ばれ、千島ではエトロフ、ウルップ両島の間を国境とし、樺太では定めないとしたことが、そのことを指しているであらうか。あるいはその後ロシアは千島、樺太から日本の勢力を追い払い、箱館を軍港とし、北海道——エゾ——を手に入れようという動きをしていたが、そうした動きが「新『占領』」として報ぜられていたのでもあろうか。

いずれにしても手紙のこのロシア云々の箇所は本稿の主題とは直接関係のないところであるが、当時日本はどういうところであったか、そしてそれをロンドンのあなたでマルクスが見ていた記述の一つとして掲げておいた。上掲の一八六二年三月六日付エンゲルスへの手紙のなかで「僕はこれらをまえにアジアにおけるロシアの進出についてのプレッセの一論説に利用した。しかし馬鹿どもはそれをせなかつた」と述べているが、この興味ある原稿はそのまま粉失された。なお上のこれらの手紙でマルクスは、中国にたいする武力行使はイギリスにとつてさして商業上の利益をもたらしていない、他方においてロシアは着々とかつつまあままと北方からアジアに地歩を固めてきているとして、ヨーロッパ反動の元兇ロシアにたいして——有名なマルクスのロシア

嫌い——親露政策を事実上とっているパーマストンを批判していたわけである。

一八六二年七月三日付 (この年月日はインスティトゥート版 Briefwechsel 編集者が推定したもの) エンゲルスからマルクスへの手紙。「新營業年度がはじまった…… / 綿花市場の Schwindel とその結果たる日々の値上がりにつきり忙殺されて、自分の頭がどこにのっているのかわからないくらいだ」。さきに一八六一年十月末に一封度一二ペンスとなったのち、一八六二年一月末に一三ペンスとなった綿花相場 (ミドリリング・オルレンアンズ) は、その後しばらくの間保合をつづけたが、六月末一五ペンス、七月末一八ペンス $\frac{3}{8}$ とさらにあらたな値上がりを示してきていた (Hendersson; op. cit. p. 122)。

一八六二年七月三十日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「これに反して南部は——この事実を目を蔽つてもなんの役にも立たない——ほんとうに真剣に事に当っている。われわれの手にすこしの綿花も入らないことが、すでにその一つの証拠だ」⁽⁶⁾。

(6) このころエンゲルスはこの五月から六月にかけて行われた南部首都リッチモンドにたいする北部の大攻撃が失敗に終わった戦況から見て、北部は勝利をえられないのではないかと疑いを抱くようになっていた。上の一八六二年七月三十日付の手紙でもそうした疑いを述べ、「これに反して南部は」といっているわけである。指揮官の無能、財政措置がよろしきをえていないこと、会戦で敗北しても北部の人心が精神的にたるんでおり、戦争が革命的に (revolutionär) 遂行される必要があるのだが、いっこうにそうならないこと、こうした点から北部の勝利は見込みがないといっていたのであるが、マルクスはこれにたいして「アメリカの内戦についての君の見解にはぜんぜん賛成しかねる。僕は万事終ったとは思わない」(同年八月七日付エンゲルスへの手紙)とし、最初は南部が有利でもそのうち情況は一変して北部は真剣に戦争遂行に当り、革命的な手段をとるようになると思うといっていた。——「とどのつまりのところはこうだと思う、この種の戦争は革命的に遂行されねばならないのだが、ヤンキーたちはこれまでそれを立憲的に (konstitutionär) やらうとしてきたのだ」。だが上のエンゲルスの手紙の、南部が真

剣にやっているから綿花がすこしも手に入らないというのはどういふことかわからない。

なおこのあとでもエンゲルスはしばらく北部の勝利を疑っていた、——「君はまだ、北部の連中が『反乱』を鎮圧できると思っているのだろうか」(一八六二年九月九日付マルクスへの手紙)、その返事、「ヤンキーについては、僕は以前と同様にたしかに、北部がけっきょく勝利をうるという見解だ。……君はすこし事の軍事的側面によって判断しすぎているように思われる」(同九月十日付エンゲルスへの手紙)。そしてリンカン南部軍の侵入にたいしてついに革命的な方法、すなわち奴隷解放を宣言した。「かの地の事件は世界変革的な (weltumwälzend) ものである」(同年十月二十九日付マルクスからエンゲルスへの手紙)。

またマルクスは一八六二年五月二十七日付エンゲルスへの手紙でも北部の発行している紙幣にあまり減価が生じていないことを述べていたが、上の一八六二年七月三十日付の手紙のなかでエンゲルスが北部は財政措置もよろしきをえていないといっていることにたいして、同上八月七日付エンゲルスへの手紙でこれを弁護している。そしてさらにエンゲルスが十月十六日付マルクスへの手紙で「財政上の破綻——それはこのような愚かな紙幣措置のもとでは避けえないところだ——が近いように思われる」といつていることにたいして、マルクスは、合衆国はこれまで全国的な租税をもっていなかったのであるが、「新税制が実施されれば、いままでたえず発行される一方だった紙幣の還流もついにはじまるだろう。それによって現在の紙幣発行規模を拡大することは不要になり、かくしてこれ以上の減価が阻止されるだろう」と弁護している(同上十月二十九日付エンゲルスへの手紙)。もちろんマルクスは北部の財政措置が「不慣れなもの」であることは十分認めていたのであり(同上「一八六二年八月七日付の手紙」)、「連邦政府の拙劣な作戦と財政上のへま (financial blunders)」(一八六二年十一月十七日付エンゲルスへの手紙)とまでいつているのであるが、しかしそれだから北部が崩壊するというように考えるべきではないと評価していたわけである。ちなみに、一八六二年五月ごろはまだだいたい一〇〇ドル紙幣の金価値が九五ドル前後であったが、その後一八六三年二月ごろまで不断の減価をつづけて六〇ドルあたりまでになり——右の一八六二年十月ごろは八〇—七五ドルであった——、ついで一八六三年八月ごろまで増価して八〇ドル台に上がったが、そのあとここから一八六四年七月までの間一路減価して最低三五ドルまで落ち、これを最低点としてその後上昇して一八六五年四、五月には六五—七五ドル、そして年末には六五—七〇ドル、といつた推移を辿った (W. C. Mitchell: A History of the Greenbacks, 1903, New Impression 1960, p. 210—11)。

一八六二年八月一日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「僕の見込みでは、前決算年度には僕は自分の収入以上を使ったことになり、今期は収入が非常に悪くなる、ということとはほとんど動かないところだ」。エンゲルスは一八六〇年三月に彼の父が死去したのち、エルメン・ゴットフリード(Ermen Gottfried)との *Associé* つまり共同所有者としてではなく *Commis* つまり使用人として同商会の仕事をつづけていたのであるが(たとえば一八六〇年五月七日付、五月十日付エンゲルスからマルクスへの手紙)、年間の自分の収入は決算をしたあとで確定することになっていたのであろう。なお「前決算年度」というのは一八六〇年七月一日からこの一八六二年六月末にいたる年度で、さきに三月五日付の手紙のなかでも収入が減少して「僕は借越となる」といつていたが、エンゲルスの財政は不況と綿花異変とによって窮境に陥ってきたわけである。またマルクスの窮境もひどくなり、イギリスの鉄道局に就職しようとして悪筆のため採用されなかったというのも、この年九月のころのことであった。

一八六二年八月二日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「僕のために君の金繰りが窮迫したことはまことに心苦しい。だがどうしたらいいだろう? アメリカの危機のようなこんな危機(*Krise*)にたいしてだが對抗しえようか? 加うるに僕の方ではウィーンの『プレッセ』のようなくだらぬ新聞を相手にせねばならぬという特別な不運。こういうふうでなければ奴っこさんたちは僕にとってすくなくともある程度は『トリビュン』の代りになりうるものだったのだが」。

一八六二年八月七日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「僕は断言する、もし家庭的な困難さえなかったら、たえず君の財布に迷惑をかける(*drücken*)よりは安下宿に移る方を問題なく選んだだろう」。

一八六二年八月八日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「僕が君に僕の支出を計算して見せたのは「さきの八月一

日付のエンゲルスの手紙では、先月払わねばならなかったものがなにに何ポンド、今日なお払わねばならぬものがなにに何ポンドと
いったことを記していた。これ以上の『迷惑』——君のいわゆる——をかけたくない気持ちに君をさせるつもりで書いた
のではけっしてなかったのだ。その反対に、われわれは将来ともお互いに助け合おうと僕は考えている。……君は彼
「ボルクハイム」に、僕「エンゲルス」は目下の悪い綿花時期にさうし (bei der jetzigen schlechten Cottonzeit)
商会からできるだけわけわづかなかねしか引出さぬようにする義務がある……といってみたまえ。「エンゲルスは、現金はい
ま窮屈だから自分を支払人とする手形を振出すからそれをボルクハイムに割引いてくれるよう話しをしてみたまえといっているの
ある」]。

一八六二年九月はじめ(この年月日はインスティトゥート版編集者の推定)エンゲルスからマルクスへの手紙。「僕はす
さまじい割合を辿っている綿花 *Schwindel* のなかでただどっかり深く椅子に座している、——勇気のある者は大い
に儲けているが、残念ながらエ「ルメン」およびエ「ンゲルス」は一こうに勇気をもっていない——、だが仕事はひど
くたくさんある。なんとか都合がついたらすぐ君に手紙を書こう」。前記のように一八六二年七月末一八ペンズ $\frac{3}{8}$ を
唱えていた綿花は、八月末には二六ペンズ $\frac{1}{2}$ と大幅に上昇し、年初の一三ペンズの倍となった (Henderson: *ibid.* p.
122)。つぎの九月九日付の手紙で「平均価値が五倍に上がった」といっているのは、一封度だいたい五—六ペンズが
普通の価格であったのでその五倍ほどという意味であろう。

一八六二年九月九日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「君は、僕がこのところ大いに懸命にやらなければなら
なかったことは想像つくまい。呪うべき綿花めは平均価値が五倍に上がったが、この相づく値がりを取引先全部にた
えず知らせておくことがどんな大へんな仕事か、君にはすこしもわからないだろう。……地代理論はこの綿花騒ぎ

(Baunvollhatz) のさい僕にはじっさい抽象的すぎる。もっと暇になったら事柄をよく考えてみなくてはならない。「八月二日付の手紙で、また八月九日付の手紙で、マルクスは地代論についてエンゲルスに書き送り、エンゲルスの意見を求めてきていた」。……この値上がり中、当地の少数の者はばく大な儲けをした。われわれのところではなんの余徳もない。一つには勇ましいはずのゴットフリードがいぜん臆病なためだが、一つには概して紡績業者はこの期間中すこしも儲けていないからだ。仲介業者(Kommissionshäuser) がいっさいをポケットに入れている」。

一八六二年十月十六日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「前週いっばい、そしてまた今週も君に手紙を書こうと準備しながら、呪うべき綿花のことのためにできなかった」。

一八六二年十一月五日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「当地では窮境(distress)がしだいに尖鋭的に(akut)なりはじめている。グンペルト(「知りあいの医師」)の言うところによると、彼の病院での比較的重い患者はいずれもチフスの性質をおびてきており、その発病がここ八―九カ月にはじまっている結核患者が非常にふえているようだ。来月までには労働者たちは現在彼らがとっている受動的な悲しい顔付にも嫌気がさしてくるだろうと思われる」。

(7) 「工場がショート・タイム操業や閉鎖をはじめるとすぐに——一八六一年十一月はじめにおいて、四九の工場がストップし——一九の工場がショート・タイムをしていた——救貧庁総裁(President of the Poor Law Board)ヴィリアス(Villiers)は、罹害地域の各救貧管理部(Board of Guardians)にあててつぎのような書簡を出した。本庁は『綿業の停滞から生じうるべき諸結果を憂慮の念をもって』見ているが、『窮境がどのように異常な量に達しても効果的にこれに対処しうるような方法を考慮中』である」と(一八六一年十一月十一日付)。救貧管理部への申出は増加してゆき、一八六二年一月には『被救恤者は例年同期の数を七〇パーセント上回った』(J. Watts, The Facts of the Cotton Famine, London, Manchester, 1866, p. 113)。二月には——この月は普通には窮民が減少するのであるが——さらに九〇〇〇人が救恤を受け、六月にはさらに六〇〇〇人、七月にはさらに二三、〇〇〇人が救恤を受けた。他方において、諸救恤委員会(relief committees)も活動をはじめていたが、

救貧管理部への申出数は増加をつづけた。一八六二年八月には三〇、〇〇〇人〔三三、〇〇〇人〕の新規の救恤申出があり、九月にはさらに二四、〇〇〇人、〔十月にはさらに五五、〇〇〇人〕、十一月にはさらに四四、〇〇〇人の申出があった〔Watts; *ibid.*, p. 114-9〕。救貧管理部が一八六二年十一月に救恤していた数は二十五万人をこえていた〔Watts; *ibid.*, p. 120. なおここでは、救貧管理部で二五八、三三七人、このほか救恤委員会で二〇〇、〇八四人、計四五八、四四一人と記し、そしてこれは前年一八六一年同期の数を上回ることに八六四パーセントであった——しかもこの前年同期はすでにこの年の九月に工場閉鎖がはじまっていたので例年よりも人数が多かった——と記している〕。十二月七日において、最近八週間に戸外救恤(out-door relief)は週一三、七三四ポンドニシリング四ペンスの支出を要したと報告された〔Watts; *ibid.*, p. 128〕 (Henderson; *op. cit.*, p. 52-3)。また右のJ・ワッツの書 *Facts of the Cotton Famine* の巻頭に掲げられている一八六二年から一八六四年の間の被救恤者数(アシトン・アンダー・ライン、プレストン、ブラックバーン、ストックポート、オールダム、ロチデルの六地区)の「変動図表」によると、一八六二年十一月・十二月がピークをなしている。なおマンチェスター、リバプールはランカシアの他の土地ほど窮境の度合が急速熾烈ではなかったとされているから (Henderson; *ibid.*, p. 74) エンゲルスが上の一八六二年十一月の手紙で「当地では窮境がしだいに尖鋭的になりはじめている」といっているのは、マンチェスターでのそうした様子をいっているのかもしれない。ともかくこの一八六二年十一月ごろは、被救恤者の数においても一八六一年秋からはじまった増加の動きがピークに達したところであったのである。

また上でいっているチフスについて。W・O・ヘンダーソンは前掲書の「綿花飢饉中のランカシア綿業労働者」の章下でその「健康状態」について、第一に粗食からくる栄養不良、第二に気管枝炎、肺炎、第三に疥癬、などが多く見られるようになったとし、第四としてつぎのようにしるしている、「これらの諸事情が結びついて流行病が生じた。プレストンおよびマンチェスターでチフス熱が流行した。『プレストンにおいてこの熱患者のうち二二七人は夏のさい中から十一月末の間に発病したと認められており、そしてこれらの患者は約二三パーセントの死亡率を示した。マンチェスターではすくなくとも一〇〇人が罹病し、同じ期間に二〇人が死亡した』。アシトン、ブラックバーン、バーリ、コールリー、およびマンチェスターでははしかが大流行し、コールリー、マンチェスター、オールダム、およびストックポートでは百日咳が、またオールダムでは『夏のさい中から十二月の間に猩紅熱のために一六九人が死亡した』と (ibid., p. 105. ヘンダーソンは、この記述は *Medical Officer of the Privy Council* (枢密院医官) の第五回報告書(一八六二年)に拠ったものとし、『エノノミスト』一八六二年十一月一日号参照とし

らるものである——『資本論』で使用されているのは第三回、第四回、第六回、第七回、第八回報告書——。「ランカシアの二、三の地方で一種の飢餓からくる悪疫(Hungerpest)が発生したことはなんら驚くにはあたらないのだ!」(『資本論』, Bd. I, S. 481, 長谷部訳、青木版七三三ページ)。

一八六二年十一月十七日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「だから僕は事態(アメリカの北部の政情)をそう悲観的には見ていない。むしろ僕の見解にとって失望させることといえ、ランカシアの労働者たちの羊のような態度(Schafhaltung)だ。こんなことは世界中でまだ聞いたこともない。工場主の奴らが自分から『犠牲を負う』ようなことはそぶりさえしないで、自分たちの兵隊を救恤する栄誉をイングランドの他の部分にゆだねているのだから、すなわち、イングランドの他の部分に自分たちの可変資本の維持費を課しているのだから、なおさらのことだ。／＼最近のこの時期にイギリスは他のどの国よりも恥さらしなことをやっている。労働者の方はキリスト教的な奴隷根性によって、ブルジョアジーと貴族とはもともと直接的な形態での奴隷制にたいする熱狂によって(8)「奴隷制の南部にたいする精神的支持のこと。だがこの二つの症状は互いに補足し合っているのだ」。

(8) マルクスは『資本論』第三巻第一篇第六章第三節「一般的例証、一八六一—一八六五年の綿花恐慌」のなかでも、一八六二年四月の『工場検査官報告書』からつぎのような工場検査官の言葉を掲げている、「労働者の苦悩は、私の前回の報告書の日付以来、いちじるしく増大した。だが、かくもつぜんでかくもはなはだしい苦悩が、かくも黙々たる忍従とかくも辛棒強い自意識とをもって耐え忍ばれたことは、産業史上かつてなかったことである」(Bd. III, S. 154, 長谷部訳、青木版二〇六ページ)。また一八六三年十月の『工場検査官報告書』からブラックバーンの委員会の会長(ヘンダーソンが工場検査官レッドグレーヴにあてた書簡のなかでつぎのようにいつていることを掲げている。「苦悩と貧困との現在の時代における私の全経験を通じて、公共事業法(Public Works Act)に従いブラックバーンの市会がこの地区の失業労働者たちに提供した仕事を彼らが引受けたさいの明るく喜んだ応じ方(hetere Bereitwilligkeit)ほど私に強い感動を与え、また私をうれしくさせたことはない。……彼がほとん

ど熱帯的な温度に慣れ、筋力よりも手先の敏捷さや正確さの方が彼にとってかぎりなくより役に立ったような労働に慣れていたらとすれば、また彼が現在受けとりうる賃銀の二倍、しばしば三倍の賃銀に慣れていたらとすれば、彼が提供された仕事を喜んで引受けたことは相当の克己と思慮とを要することであり、これは彼にとって最高の名誉となるものである」(S. 158, 同上訳、二一〇ページ)。また同じ一八六三年十月の『報告書』から、——「労働者たちの態度はほとんど非難の余地なきものであった、……彼らは喜んで屋外労働を引受け、そしてそれをやりとげた」(S. 158, 同上訳、二一一ページ)。また一八六四年十月二十二日にバーナル・オスボーン氏は自分の国会選挙民たちにたいする演説のなかでつぎのようにいったとし——「ランカシアの労働者は古代の哲学者たち(ストア派)のように振るまつた」——、そしてマルクスはそこに「羊のようにではなかったか(Nicht wie Schafe)」と記す(S. 161, 同上訳、二二三ページ)。

W. O. ヘンダーソンは前掲書の「ランカシアにおける窮境の救済」の章を結ぶに当って、綿花飢饉中における救恤制度はかなりよく活動しえたといつてよいとし、そしてつぎのように述べている、「労働者たちはきびしい苦痛を受けたが、しかし彼らの大多数が餓死にも暴力にも追いやられなかったのは、政府ならびに私人が窮境に置かれていた彼らを援助するために採った措置に負うところすくなくならざるものがあつた」と(op. cit. p. 93)。

なおマルクスは上の手紙のように、また『資本論』でも、ランカシアの労働者を「羊のような態度」と評しているが、他方において、イギリス・ブルジョアジーが奴隷制の南部にたいして陰に陽に精神的な支持を与え、一部は内戦への干与を説いたのに反し、労働者階級は綿花飢饉の苦難をもっとも強く受けたにもかかわらず、北部支持の立場を堅持していたとして、これを高く評価していた。このことはさきに掲げたダービーの議会演説について書いたマルクスの一八六二年二月の論説においても窺われるところであるが、たとえばまた『トリビュン』一八六二年二月一日号所載の論説「イギリスの世論(English Public Opinion)」(執筆日付一月十一日。大月選集訳、補巻1、六六一七三ページ)のなかで——これは一八六一年十一月におこつたトレント号事件が平和的解決をみたさいに書かれたものであつた——、マルクスはつぎのように述べている、「トレント号事件の平和的解決のニュースを大部分のイギリス国民は狂喜して迎えたが、それは危惧されていた戦争とそれがもたらす恐るべき結果が一般に不人気であつたことを、はっきり証明している。すくなくともイギリスの労働者階級だけは、この困難な事件の最初から終りに、一度もアメリカを見棄てなかつたことを、合衆国はけつて忘れてはならない。金銭づくで向う見ずの新聞が毎日有毒な刺戟剤を盛つたにもかかわらず、平和が危胎に類していた全期間を通じて、イギリスではただ一つの開戦主張の集会も公けに催さ

れなかつたのは、労働者のおかげであつた。……イングリランドやスコットランド、あるいはアイルランドで大衆の集會が行われたところではどこでも、そうした集會は新聞の狂暴な戦争の呼号や政府の悪質なもくろみに抗議し、この係争問題を平和的に解決するよう要請した。……尋常の事情のものとなら、イギリスの労働者たちのそのような行いは、全世界の人民階級が世界における唯一の人民の政府〔?〕にたいして抱くはずの自然な同情心から予期しうるものであつたかも知れない。——しかしながら現在在は、南部が封鎖されている結果イギリス労働者階級の大きな部分が直接ひどい苦しみを味つているときであり、また労働者の他の部分も共和党の利己的な『保護貿易政策』に帰因する——彼らはそう教えられているのであるが——対米貿易の減退によつて間接の打撃を蒙っているさいであり、……このような事情を考えると、イギリス労働者階級の健全な態度に賞讃の辞をおくらなければならぬのはまことに当然のことである」と。また『ブレッセ』一八六二年二月二日号所載の論説「ロンドンの労働者集會(Ein Londoner Arbeitermeeting)」(執筆日付一月二十八日。大月選集訳、補巻1、一七四—一八ページ)においても、つぎのように右の『トリビュン』論説とほぼ同じことを述べている、「奴隷諸州の封鎖がきっかけとなつて、工場閉鎖と労働時間間の短縮とがイングリランド北部工場地帯にひきおこした窮状は、とても信じられないほどのものであり、それは日ごとに増大しつつある。他の産業部門の労働者たちは、それほどまでは苦しんでいないが、しかし彼らも紡績業の危機の残余の生産部門への反作用によつて、またモリル関税の結果としての北アメリカ向けの彼ら自身の生産物の輸出削減によつて、さらには封鎖の結果としての南部向け輸出の全滅によつて、大打撃を蒙っている。したがつて現在、アメリカにたいするイギリスの干渉は、労働者階級にとっては飯の問題となつてゐる。……このような事情のもとで、労働者階級が沈黙を守ること、あるいは、干渉反対と合衆国援助の声をあげるためにだけその沈黙を破るといふ頑固さは、じつに賞讃に値する。これはイギリスの大衆の打ち破りがたい優秀性を示すあたらしい、かがやかしい一証拠である」と。トレント号事件を口実に南北戦争に干与しようとするイギリス支配層の一部の動き、これにたいしてマルクスはこれを国際法的にも恥しらすの行動だとして非難し、攻撃するいくつかの論説、通信を当時『トリビュン』や『ブレッセ』に寄せたのであつたが、そういうところからも、イギリスの労働者階級のこうした態度にたいしていささか過褒と思われる絶讃の辞をおくつていたわけである。

イギリスでのごうした北部支援の労働者集會についてはつきに見る一八六三年一月二日付の手紙にもしるされているが、さらにまたこのちにおいて、マルクスはたとえば一八六四年十一月末—十二月初めに当時大統領に再選したリンカンへの国際労働者協會から挨拶(Address)を起草したが、マルクスはそこで「ヨーロッパの労働者階級」は奴隷所有者の反乱にたいして斗

う北部を強く支持しているとして、つぎのように述べている。「巨大なアメリカの斗争が開始されて以来、ヨーロッパの労働者は、星条旗が彼らの階級の運命を担うものであることを、本能的に感じていました。……それゆえに、いたるところで彼らは、綿花恐慌によって彼らの上に課せられた困苦を忍耐つよく耐えしのび、奴隷制援助の干渉——これこそ上流階級が執拗に求めているところである——熱烈に反対し、……ヨーロッパの労働者は、アメリカの独立戦争が中間階級（ブルジョアジー）の優越の新時代を開いたように、アメリカの奴隷制反対戦争が労働者階級の優越の時代を開くであろうことを確信しています」云々と記している（大月選集訳、補巻1、三四六―七ページ。なおこのリンカンへの挨拶についてはマルクスからエンゲルスへの一八六四年十二月二日付、一八六五年二月一日付、二月六日付、二月十日付の手紙参照）。——「一八世紀のアメリカの独立戦争がヨーロッパの中間階級にたいして合図の鐘（Sturmglocke）をうち鳴らしたように、一九世紀のアメリカの南北戦争はヨーロッパの労働者階級にたいして合図の鐘をうち鳴らした」（『資本論』第一版への序言、Bd.I, S.7. 長谷部訳、青木版七二ページ）。

一八六三年一月二日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「タイムズ紙一派は、マンチエスター、シェフィールド、およびロンドンにおける労働者集会について狂気のように怒っている。こういうやり方でヤンキーたちの目を開いてやるのはたいへんよいことだ。そのうえオプダイク（Opdyke）（ニューヨークの市長であり、かつ経済学者）はすでにニューヨークのある集会でつぎのように述べている、『われわれは、イギリスの労働者階級がわれわれの味方であり、イギリスの支配階級がわれわれの敵であることを知っている』と。／＼ドイツがこれと同じようなデモンストレーションをやらないのは、すこぶる残念だ。……綿花の価格は下落している。だがこれは僕の見るところではただ一時的なもののように思われる」。一八六二年八月末、九月末に二六ペンスタという高さにまで達した綿花相場は、その後十月末二三ペンスタ、十一月末二二ペンスタ、十二月末二五ペンスタとやや下がってきていた（Henderson, *ibid.*, p. 122）。これはインドはじめ世界の各方面から綿花がしだいに入ってくるようになってきたためであろう。「一八六一年にグレイト・ブリテンは一、二六一百万封度の綿花を輸入した。つぎの年にはこの量の半分以下しか入手で

きなかった——五三三百万封度。その後輸入は徐々に増加し、一八六三年にはほぼ六九〇百万封度、一八六四年には八九六百万封度、一八六五年には九六六百万封度、そして一八六六年にはほぼ一、三五四百万封度となった」(Henderson; p. 50, この数字は T. Ellison の書から採られたもの)。一八六三年一月末は二三・ペンズ、二月末二一・ペンズ $\frac{1}{2}$ 、そして夏ごろまでだいたいこのあたりで保合い、その後秋から年末にかけてふたたび引締って二七—二九ペンズを上下した (Henderson; *ibid.* p. 122)。

一八六三年一月二十六日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「……投機のために買っておいた糸の一部を売り、その額をエルメンに返さないで(かねは彼のものだが)君に送る、ということを考えてみた。それはけっきょくのところ具合よくゆくはずだった、というのは事は七月になってはじめて問題になるのだが、それまでにいろいろな変動がおこりうるからだ。だがチャンスがなかった。市場は今日はきわめて景気が悪く、売ったら利益があるどころか損をするにちがいがなかった。そしておそらく今週中は売ることができないだろう。……こんどは君も自然にわかっただろうが、僕は一八六二年六月三十日以来並々ならぬ努力をしなければならなかったのだが、まったくカラっぽになってしまっており、したがって君は六月三十日まで、いくらかの小額以外には、もはや私の側からの送金はぜんぜんあてにできないのだ。六月三十日後にはどんなことになるか、それは悪魔が知っていよう」(ぜんぜんわからない、ということ)。というのは、市場にもはや値上がりがないため、いまはなんの儲けもないからだ」。

一八六三年四月八日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「あたらしい版については(これより前、マルクスはクーゲルマンからの手紙をエンゲルスに廻したが、それに『イギリスにおける労働者階級の状態』の新版を出したらということが書いてあったのであろう)、イギリスのプロレタリアートからいっさいの革命的なエネルギーがまったくとっていいくらい消

失してしまい、そしてイギリスのプロレタリアがブルジョアジーの支配を完全に承諾すると言明している現在では、どのみち適当な時期ではない」。

一八六三年四月九日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「どのくらい早くイギリスの労働者が彼らの顕著なブルジョアの感染からみずからを解放するかは、待ってみなければわからない。それはともかくとして、君の本のなかの主要点にかんしては、一八四四年以来のその後の発展によって細微なところにもいたるまで確認されている。というのは、この本を僕はいま一度このあとの時代にかんする僕の覚え書と対比してみたのだ。……君の本を読み返してみて、身の老いたことを感じさせられて歎いた」。

一八六三年八月十五日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「イギリスにかんする君の本が出て以来いまになってやっとふたたび第二の児童雇傭委員会報告書(Children's Employment Commission Report)が出された。⁽⁹⁾この報告書は、工場法によって若干の産業部面から駆逐されたあらゆるひどいことがあらたな勢いをもって障害のない分野にはびこっていったことを証明している！報告書が全部出たさいには、君の本にとってすばらしい補遺(Nachtrag)となるだろう」。

(9) "Report of the Commissioners on the employment of children and young persons in trades and manufactures not already regulated by law" (『いまだ法律によって規制されていない商工業における青少年の雇傭にかんする委員たちの報告書』)の第一回報告書が一八六三年六月十三日付で出された。上で「君の本が出て以来いまになってやっとふたたび」といっているのは、エンゲルスが『イギリスにおける労働者階級の状態』のなかで、一八四一年に第一報告が、一八四三年に第二報告が出された『児童雇傭委員会報告書』を諸所で用いていたからである。エンゲルスはこの『報告書』について『労働者階級の状態』のなかでつぎのような説明を註記している。——「工場取締法の条文の適用範囲外にあるが、多数の青少年と一緒に就業させている鉱山、炭坑、および商工業における青少年の雇傭についての調査委員会の報告書、第一および第二報告書。……」

これは普通『児童雇傭委員会の報告書(Children's Employment Commission's Rept.)』として引用されているもので——最良の公的報告書の一つであり、多数のきわめて価値のある、だがしかしまたきわめて恐るべき事実を収録している。第一報告書は一八四一年に、第二報告書はその二年後に出了(Dietz Verlag, Berlin, 1952, S. 146. 大月選集訳、補巻2、一六三—一七三)。マルクスは周知のように『資本論』第一巻のなかで上の『青少年の雇傭にかんする委員たちの報告書』を『児童雇傭委員会報告書(Children's Employment Commission Report)』として、その一八六三年刊の第一回から一八六七年刊の第六回にいたる報告書を諸所で用いているが、そのことについてはまたのちに。

一八六四年七月四日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「もし僕がこの十日間かねをもっていたら、当地の取引所で大いにかね儲けができたろう。いまはふたたび、気転がきいてかつほんのすこしのかねがあれば、ロンドンでかね儲けができる時期だ」。前掲ヘンダーソンの書の価格表で見ると、一八六四年の綿花価格は——同じくミドリング・オルレアンス、一封度当り——一月末二七ペンス $\frac{1}{2}$ 、二月、三月、四月微落して四月末二七ペンス $\frac{3}{4}$ 、そこから夏にかけて上昇に転じ、五月末二八ペンス $\frac{1}{2}$ 、六月末三〇ペンス、七月末三一ペンス $\frac{1}{2}$ ——これは綿花飢饉中の最高月末値——、八月末三〇ペンスとなった。なおその後は下落の線を辿り、九月末二七ペンス、十月末二二ペンス、十一月末二七ペンス $\frac{1}{2}$ 、十二月末二七ペンスとなった(ibid. p. 122)。この動きについてJ・ワッツはつぎのように書いている、「一八六四年にもオルレアンス綿の価格はいぜん郵便の着くごとに変動した。だがニュースは以前とはちがった影響をもたらした。連邦軍(北部)の勝利は綿花価格の騰貴ではなく下落をひきおこした、というのは、いまでは和平への道が見出されるのは南部連合の屈服を通じてだけだということが、かなりよくわかってきたからであった。毎月の平均価格は戦争の勝敗の変動によっていぜん影響を受け、かくして一月から四月までは綿花は下落し、四月から八月までは騰貴し、九月には不安定に動き、そして九月から十一月まではナイアガラ瀑布からの和平の噂(Peace

rumours)の結果として封度当り七ペンス下落し、その後、交渉がまとまらなかったので年末前にふたたび封度当り三ペンス騰貴した」(Facts of the Cotton Famine, p.360)。

またヘンダースンはこの一八六四年の状況についてつぎのように述べている、「一八六四年の春、ランカシアはその繊維産業の長い不況からついに回復したように見えた。ブームがおこった。だがそれは綿花の先物にたいする『スペキュレーション・マニア』に墮落していった。イングランド銀行は、そのレートを五月五日に九パーセントに引上げてこれを抑えた。その後レートはふたたび下がったが、しかし秋には大量の綿花の到着とアメリカでの和平の噂とから、『これまでの商業史上最大の、かつもっとも急激な綿花価値の低落、あいつづく三週間で封度当り六ないし七ペンスの下落』がひきおこされた。……九月、十月、および十一月に約一二〇の木綿商會が支払停止をした。バンク・レートは九月八日に九パーセントに上がり、パニックが生じたが、このパニック中に Leeds Banking Company および Unity Joint Stock Mutual Banking Company が支払停止をした。南部が崩壊しつつあると見られた一八六五年ははじめのころの月にも、ランカシアでいま一度パニックがおこった。二つのリパールの銀行が破産した」(ibid. p.22-3, 『内々 M. Williams (1864), p.69』。これがつぎに見る手紙でもいっている一八六四―五年の「恐慌」である。

一八六四年十一月二日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「恐慌とそれからくる煩累のため、君に手紙を書くのが遅くなった。……君は商業恐慌をどう思う？ 僕はそれはすぎ去った (vorüber) ！ つまり最悪のところは、と思う。こうしたものが現在もうこれで止まって正常に成熟しないのは残念なことだ (Es ist schade, daß so was jetzt nie mehr ordentlich reif wird) ！」

一八六四年十一月四日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「大会は窒息するほどぎっしりつまっていた(それはいま明らかに労働者階級の復活が起りつつあるからだ)〔既述のように一八六四年九月二十八日にロンドンで国際労働者協会の創立大会が開かれ、マルクスは招かれてこれに出席したが、そのときの様子をエンゲルスに知らせているもの〕。……恐慌。大陸ではもう長いこと燃えつきないでいる(とくにフランス)。ともかく、恐慌は現在、強度において欠けているところを頻度によって補っている」。

一八六四年十一月九日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「昨日のガーディアンを送るが、そのなかで、マリー氏〔Herrn Marie. フランスのこと〕の国民作業場(ateliers nationaux)とエングレンダー氏〔イギリスのこと〕のそれとの間にどんな差異があるかを知るには、君は救恤委員会(Relief Committee)の報告書を見なければならぬ⁽²⁾。前者においては有用かどうか疑わしい仕事⁽³⁾がなされたが、しかし支出された貨幣の大部分は失業した労働者の手に入っていた。当地においても同様に必要かどうか疑わしい(だが、けっきょくブルジョアのためにはたしかに有用な)仕事⁽⁴⁾がなされているが、しかし二三〇、〇〇〇ポンドのうち工場労働者の手に入るのは——全額がこれらの手に入るようにきめられているのに(すなわち、なんらかの『不熟練労働』にだけ向けられることになっているのに)——わずか一二、一〇〇ポンドにすぎない。したがって窮迫した工場労働者救済法(Der Act for the relief of the distressed factory operatives)が窮迫してない、中産階級〔ブルジョアジー〕救済法(For the relief of the undistressed middle classes)に転化されており、しかもこれらの中産階級は自治体税を免除されているのだ」。

(10) 「公共事業——一八四八年の国民作業場(Ateliers nationaux)のこの新版」といっても、こんどはブルジョアジーの利益のために設けられたもの」〔『資本論』 Bd. III, S. 159, 長谷部訳、青木版二一—二二ページ〕。

一八六四年十一月十四日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「君がいつているガーディアンのもは僕にとつてきわめて重要だ。僕はきたならしいことをすでに、だが苦心してやっと断片的に、工場報告書から拾い集めていた」。

一八六四年十一月十八日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「マンチエスターでは綿花飢饉にかんするまだいろいろなもの——僕の云うのは労働者にかんする——がその委員会から出されているようだ。それを手に入れてもらえないだろうか？」

一八六四年十二月十日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「例の救貧院のパーディ(Purdy)⁽¹¹⁾が綿花飢饉中にきわめて恥ずべき文書を公刊し、そのなかで彼は、木綿労働者の健康状態が表面上良くなってきたことを根拠として、扶助を最小限に引下げることがを勧告したそうだが、その結果ランカシアの東部に飢饉病(famine diseases)が急に発生したということだ。(これは綿花飢饉の最初のころのこと。) 君はそれについてなにか知っていますか？ また一般に綿花飢饉に関係あるマンチエスターで出た公文書(委員会その他の)を手に入れてもらえないだろうか？」

(11) W.O.ヘンダーソンの前掲書の Bibliography を見ると F. Purdy, On the Pauperism and Mortality of Lancashire なる論文が掲げられており、British Association for the Advancement of Science の一八六二年 pp.165—172、一八六三年 pp.159—61 に所収とし、『タイムズ』一八六二年十月六日号参照としている。

一八六五年二月七日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「アメリカでは三—四月のリッチモンド前面の戦斗開始が、おそらくこの一年間の運命を決するだろう。グラント〔北軍総司令官〕がそこからリー〔南軍総司令官〕を駆逐することに成功すれば、南部連合はもうだめで、その軍隊は解体してしまう……リーの軍隊はじっさいのところ現在すでに、南部が持っている唯一の軍隊であつて、万事がこの軍隊の破砕にかかっている」。

一八六五年三月三日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「……そのうえシャーマンの戦果の結果としての綿花パニック [cotton panic in Folge der Fortschritte Shermans. 北部の將軍 W. T. シャーマンが南部のジンストン將軍を降伏させたことを指しているのであらう]、および果しない手紙書き、さらにまたストックを処分しようとする無駄な試み (忙しくてこの週マルクスにくわしい手紙を書けないという弁明の言葉)。僕は、十四日のうちにリッチモンドが開け渡され、そして四週間のうちに最後の決戦が斗われると思う、——リーがあらたに二、三カ月敗北を延ばすような奇蹟でも起こさないかぎり」。

一八六五年三月四日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「南部連合はおわりとなったように見える。……綿花恐慌に関係あるマンチェスターのジャーナリズムの文書 (die auf cottoncrisis bezüglichen Papiere des Manchester Journalismus) を僕に送ってもらえないだろうか?」

一八六五年三月六日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「君のいう『綿花恐慌に関係あるマンチェスターのジャーナリズムの文書』とはなんだろうか? 多分救恤委員会のこと? 僕はだいたいしばらくの間マクラー (Maclure) ⁽¹²⁾ に会っていないが、会ったらすぐ彼に頼んでみよう」。

(21) J. W. Maclure のことであらう。マンチェスターに救恤の申出を受け、Central Relief Committee に救恤金の支給を司る Central Executive Committee とが設けられていたが、J. W. マクラーはこの後者の主事 (Secretary) として活動していた人。——Henderson; op. cit. p. 76, p. 174, また Watts; op. cit. p. 460.

(13) このように、おきの一八六四年十一月十八日付の、また十二月十日付の手紙でも、またここでも、マルクスはマンチェスターで出ている cottonfamine にかんするものあるいは cottoncrisis にかんするものを送ってくれといっているが、またエンゲルスがこれにたいしてどのように送り届けていたのかわからないが、ともかく『資本論』では、この綿花飢饉中の状況については『工場検査官報告書』、『児童雇傭委員会報告書』、『衛生局報告書』のほかのものはほとんど用いられていない。

一八六五年四月十一日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「綿花恐慌はどんな具合ですか？ その点についての消息がほしい」。

一八六五年四月十二日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「綿花恐慌にかんじていうと、当地ではまったくすてきな様相を呈している (*sieht es hier ganz heiter aus*)。七月〔一八六四年〕に三一ペンス $\frac{3}{4}$ だった綿花(ミドリング・オルレアンズ)が先週の木曜日の相場では一四ペンス $\frac{3}{4}$ となり、そして今日は、売ろうとすればやっと一四ペンスにしかならない。つまり半分以下の減価だ。十二月三十日にはこれはまだ二七ペンスの値だったから、三カ月間に一二ペンス $\frac{1}{2}$ ないし一三ペンスの下落！ 加えて、亜麻、羊毛、砂糖、および一般にあらゆる輸入品が下落し、その損失はすくなくとも四千から五千万ポンド・スターリングに達する。こんなとき俗物たちが一文なしになってしまうことは (*Daß da dem philister das Grundeis in der Hose los wird*) わかるだろう。リバプールではもはやぜんぜん破産も行われなくなっている (*wird schon gar nicht mehr falliert*)。支払不能になった者は、その債権者(かの地では大ていのばあい二、三人だけだ)のところに行き、支払不能になったことを告げてながしかのかねを提供するのが、これはすぐに受諾される。というのは、ひとはすこしでも手に入れたいし、またいっさいのスキヤンダルを避けねばならぬからだ。こういうふうだから腐っている建物全体は倒れない。こうしたひそひそとした示談はなん百となく行われているらしい。そして今日すでに当地でも、ストックポーターの最大の工場主の一人が——彼は三つの大工場を所有しており、綿花投機だけで近年二十万ポンド儲けたといわれている——たったいま同じようなひそひそとした和議をしたということだ。だがまたこれですべてではない。インドから白綿にたいして振出された手形があと六週間で満期となるが、そうしたラッシュイイス (*Joyce*) 以外にもまだ多くの者がお手上げになるだろう。

スコットランドでも多くの者がそんなところまできており、そしてある天気晴朗な朝に順番が銀行に廻ってくるにちがいない。そうなったところで事態は完成するのだ(dann ist die Sache fertig)。そのうえ、オーストリーでは紡績業者や工場主たちがダースで破産しているし——全べーメンでまだ持ちこたえているのは『大リービーヒ(Der große Liebieg)』だけで、他の者はみなつぶれてしまった——、またポーランドでもいま丁度はじまったばかりだ。／／工業自体はあまり影響を受けていない。小さいところは大きいところはだていもうだいぶ前に破産してしまうか、まったくひそかに消えさせてしまったし、大きいところは、ともかく注文さえ手に入れば、現在ふたたび若干の利益をえて仕事をすることができる。彼らのうちで破産するのは、悪い機械を持っている者か、綿花から「von dem cotton. 綿花投機の意である」手を引くことができない者だけだ。綿糸や綿布の在庫品ではだれもが損失を蒙っている。われわれもそれでありにがい目に会っている。とくに僕にとっては、もし昨年それが起きたばあいよりも、倍加したにがさだった。というのは、僕は共同所有者(Assozié)になっているからだ。⁽¹⁴⁾／／商業の道德性もまた、現在まことにかがやかしいものがある。今日商品を買ったとする、そうすると引渡しを受けるまでにそれは封度で三、四、五ペンス値下がりする。そのため、こうした損失を来たす契約を破棄すべく、あらゆる詭計や支払拒否が行われる。そこで口論やいさかいの手紙が果しなくつづく。僕は泥のなかに首まではまりこんでいる。そうした手紙書きや腹立たしさがどんなか君にはまるでわからないだろう」。

前掲ヘンダーソンの書の価格表で見ると、綿花価格はつぎのような動きを辿った——前と同じくミドリング・オルレアンズ、一封度当り——。一八六四年十二月末の二七ペンスから一八六五年一月末には二四ペンス $\frac{1}{4}$ 、二月末一九ペンス $\frac{1}{2}$ 、三月末一五ペンス $\frac{1}{4}$ 、四月末一四ペンス $\frac{3}{4}$ 。つまり南部の敗北がきまり、内戦が終りとなったことから、

そしてパニックとなって、はげしい急落が生じたわけである。だが相場は一八六五年においてはここが底値であつて、五月末一六ペンス $\frac{3}{4}$ 、六月末二〇ペンス $\frac{1}{4}$ とやや上がり、このあとまたすこし下がって八月末一八ペンス $\frac{3}{4}$ 、そしてふたたびまた上がって九月末二一ペンス $\frac{3}{4}$ 、十月末二二ペンス $\frac{1}{4}$ ——つぎの一八六五年十月四日付の手紙でエンゲルスが「綿花は十四日間に封度当り一八ペンスから二四ペンス $\frac{1}{2}$ に騰貴した」といっているのは、このころのことである——、そして年末は二一ペンス $\frac{1}{2}$ であつた (ibid. p. 123)。

(14) 前記のようにエンゲルスは一八六〇年三月に彼の父が死去したのち *Commis* つまり使用人としてエルメン・ゴットフリードのもとに同商会の仕事をつづけていたが、一八六四年秋にゴットフリードと *Associé* つまり共同所有者という形をとることになった (一八六四年九月二日付エンゲルスからマルクスへの手紙など)。

なおこの共同経営の契約期間は五カ年であつたが、契約期間がおわりとなるに当ってエンゲルスはゴットフリードにその持分を売り、一八六九年六月三十日をもって同商会から身を引いた (一八六七年四月二十七日付、一八六八年十一月二十九日付エンゲルスからマルクスへの手紙など)。既述のように七月一日から翌年六月三十日までが営業年度であつた。一八六九年七月一日付エンゲルスからマルクスへの手紙、——「ばんざい！ 今日はそのしい商売 [doux commerce. 日語は *handisch* な (大のような) 商売といっていたのであるが、——たとえば一八六七年四月二十七日付マルクスへの手紙] がおわり、僕は自由な身になつた」云々。

一八六五年十月四日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「……僕が旅行から帰ってくるといつもそうだが、綿花市場は悪魔につかれていて、……綿花は十四日間に封度当り一八ペンスから二四ペンス $\frac{1}{2}$ に、また糸は封度当り八—九ペンス騰貴し、そしていろんな電報が雨のように降ってくる。……このようにめっちゃめっちゃに忙しくて、わずかに二行の手紙を君に書くことさえまゐりできなかった」。